



きっかけは一冊のスケッチブック

鳴海

「私達は、6年前にくろしお保育所の同じクラス担当になりました。保育所の近くには松林や遊歩道があるので、よく子ども達を連れて遊びに行きます。自然の中で遊びまわる子ども達のように、森山先生は帰ってからのちよつとした合間にスケッチブックに描いていたのです。それも本当にイキイキとした表情ときれいな色使いなので、この絵を紙芝居や絵本にできたらいいのかなあといつも思っていました。ストーリーは子ども達と接して感じてきたこ

とです。親つてどうしても自分の子と他の子を比べてしまふんです。あの子はもう字が読めるとか、うちの子はまだできないとか、まるでその子がダメみたいな言い方で話しているお母さんとそれをそばで聞いている子どもも見て、『みんな同じじゃないよ、違っているからいいんだよ』ということをお母さんかっただです。」

森山

「私は小さい頃から絵を描くことが好きなので、毎日、子ども達が無邪気に遊ぶ姿や、思わぬハプニングを見ていてかわいいなあと思いつただけ描きとめておきたかっただけなのです。ですから、鳴海先生から『こんな話作っただけで絵を描いてくれる？』と原稿をもらったときは、自信がなくて不安でいっぱいでした。パンダを描いたことがなかったですし(笑)。でも、お話を読んでどんどんイメージがふくらみ、描きたいと思う力が湧いてきました。」

鳴海

「出来あがった紙芝居は子ども達にときおり読み聞かせていたのですが、たまたま市立図書館に行った時コンクールのことを知り、この絵をもつと誰かに見てもらいたいと思って応募しました。私は森山先生の絵を見るとストーリーが生まれてくるんです。森山先生も私の話を読むと絵のイメージが広がると言ってくれます。私達それぞれが持っているものは小さいものですが、ふたりが力を合わせるとこんなに大きく、1+1=2以上になるということを発見しました。」



なるみじゅんこ
鳴海潤子さん



もりやまゆうこ
森山祐子さん